

076789-000-7

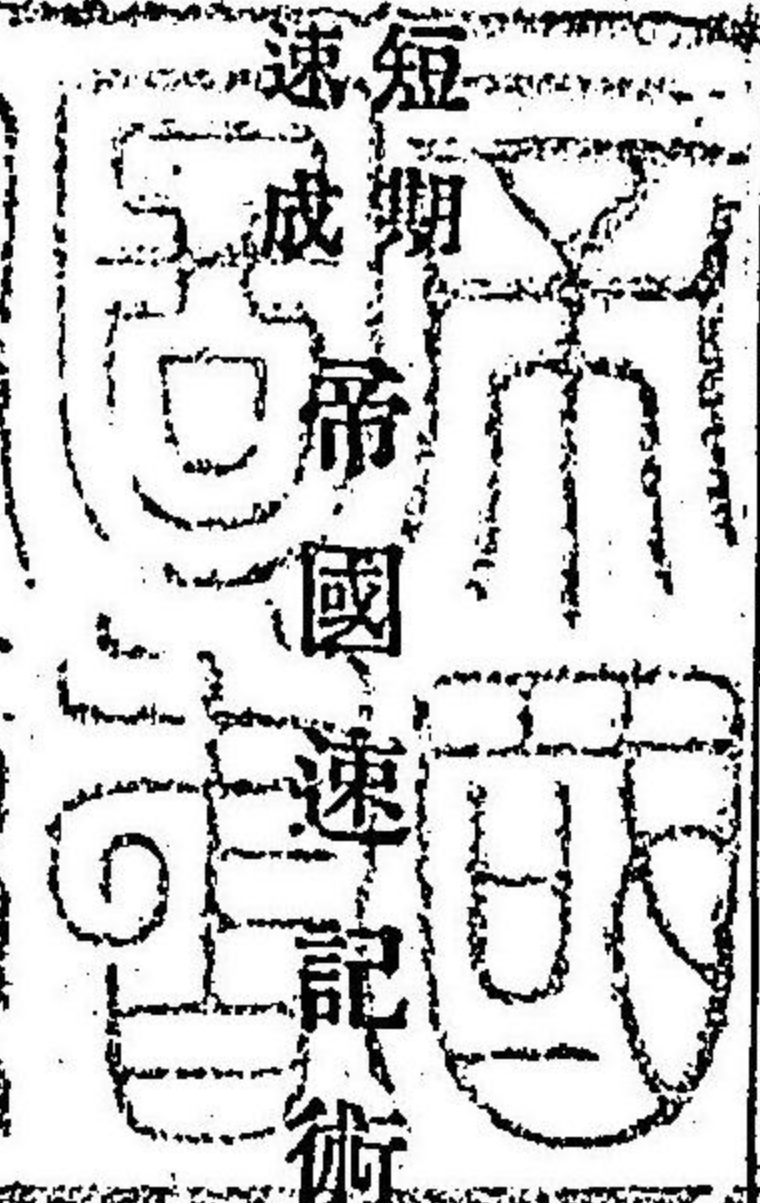
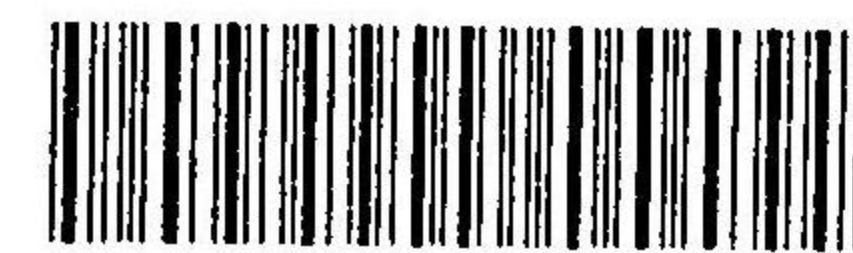
特67-852

帝国速記術独習教授書

帝国速記学会

M38.2

DAB-0147



獨習教授書

緒言

短成帝國速記術 獨習教授書

世に速記術の教授法を講ずるの書多しといへども、徒らに冗言を費して其修得の方法を長日月に渉るの僻弊を知らず、空しく修業者をして望洋の歎を發せしめ、遂に中途に於て廢學するの不幸あらしむるは、豈概歎に耐わざるべけんや、抑々斯術たる之を修むる素も難苦なるものにあらざといへども、其教授法の方法順序宜しきを得ざるより隨ふて簡易速成的の功果を見ること能はざるなり、本會茲に見るありて此書を編成し、彼の學期の長さに倦きて廢學するの不幸者を拯はんとす、是れ即ち特に帝國の二字を冠して、在來迂遠の教授法と異なるを證する所以也、修業者夫れ之れを諒せられ

明治  
38 2 15  
内交

## 速記術獨習の順序

速記術を獨習せんとするものは、先づ速記術の何たるを解するを要す、速記術とは一種の符號を以て人の言語を一言の脱漏なく筆に現すものなり、故に修業者は左の資格あるを要す

### 一 學力と腦力

修業者は新聞、雜誌に散見する普通の熟語、俗字を讀み得るの學

力を有すべく、又演説、講義等を聽聞するとき、其言語の意味を最も機敏に理

解するの腦力なかるべからず

### 一 習字の方法

速記術は最も習字に熟練せざるべからず、習字拙なるときは如何

に學力、腦力の完全なるものも應用の功を成すべからず、撓まず屈せず習字を

學ぶべし

### 一 用筆と用紙

筆用は鉛筆にして極めて軟らかきを撰び、成るべく先を尖細に削

り一度に拾本位は削り置くべし、而して之を使用するには

下の圖の如く人差指と中指との間に挟み、親指にて押へ成

るべく軽く走らすべし又尖端を砥めざる様注意すべし、



用紙は駿河半紙の紙質良きを撰び、其一帖又は二帖を二ツ折に綴ぢて用ふべし

### 一 練習の注意

速記文字は凡て左方より右方へ書き綴り、字畫を正確に認め毫も

紛らはしき筆遣ひをすべからず、而して毎日二時間若しくは三時間を練習すべ

し、聽て少しく習得したる時に試みに人の言文一致体の文字を緩かに朗讀して

貫ひ、之を筆記すべし

### 一 復文の心得

速記したる文を普通字に直すときは心を靜穩になし、一意専心に

復文すべし、若し長時間を経過したる後に復文するときには忘却の恐れあり  
 左に掲ぐる單音(俗に謂ふ假名) 數十字は恰も英語と羅馬の數十字の變化し、夥多の  
 文字を生むが如く、アイウエオ。カサタナハマヤラワの十四字よりして、夥多の文  
 字を生み出して數萬に渉る人の言語を速寫する大切なる文字なれば修業者其心して  
 幾度となく書取り見るべし

(重複するを以てキウエヲを略す)

注意 右單音文字中十三字に○印あるは此の方より筆を初むべしと云ふ印なれば文字と誤解せざる様注意すべし、且つ是より數頁先にある尾音にも斯かる印あれば忘れざる様にすべし

記憶法 先づ第一に覺ゆるは横線アイウエオの五字なり、次には縦線のアカサタナハマヤラワの十字を記憶すべし即ち此の十四字が父母と云べき文字の起元なり而して他の三十二文字は一見一考して其變化したる事明かならんが尙念の爲め左に其變化の一例を擧げん

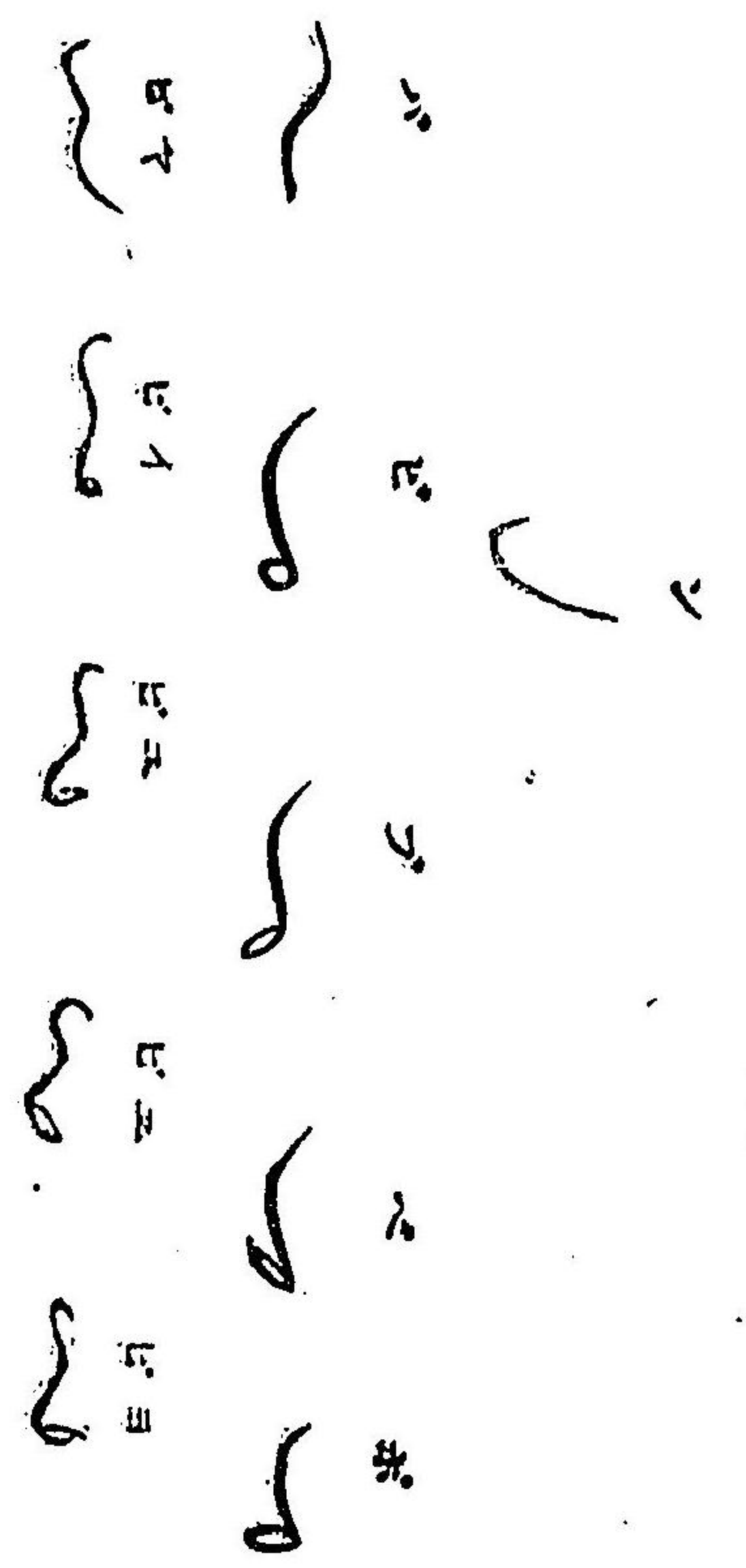
例 一の右端に<sup>イ</sup>を食付けて キ となり又 カ に <sup>ウ</sup> を付けて ケ <sup>サ</sup> キ <sup>シ</sup> ク を付ければ ク となる如く即ち イ は カ さき イ と形取り又 ウ は 左 より 右 に斜めなる シ にして ク は ク 又 シ は オ となり凡て斯くの如く十三字より他の細長き輪 ク にして ク は ク 又 シ は オ となり凡て斯くの如く十三字より他の

の三十二字は出来たるなり否違ふ夥多の文字か出来得べき大切なる文字なり  
其内ノ、マ、フの三字は此例外に出でたるものなれば注意せよ  
倍て次には復音の練習にかゝるべし但し單音を能く胸に疊まざる内は此の復音の練習に移る可からず开は心ちり、氣、迷ふが爲め記憶に弊害を來せる所以なり



以上の如くにして何事にも自己の胸に浮ひし事を綴り試むべし  
 文字の大きさ 成るべく小さく書くは宜しけれど初學者には中々小さくは書き難き者  
 なれど少なくとも此の手本位に書き練習すべし  
 此次には反音の練習に移る可し但し以上の綴字の練習を五時間以上せざれば是れに移  
 るべからず

反音



さて反音を暗記し得る様になれば次の濁音に移るべし

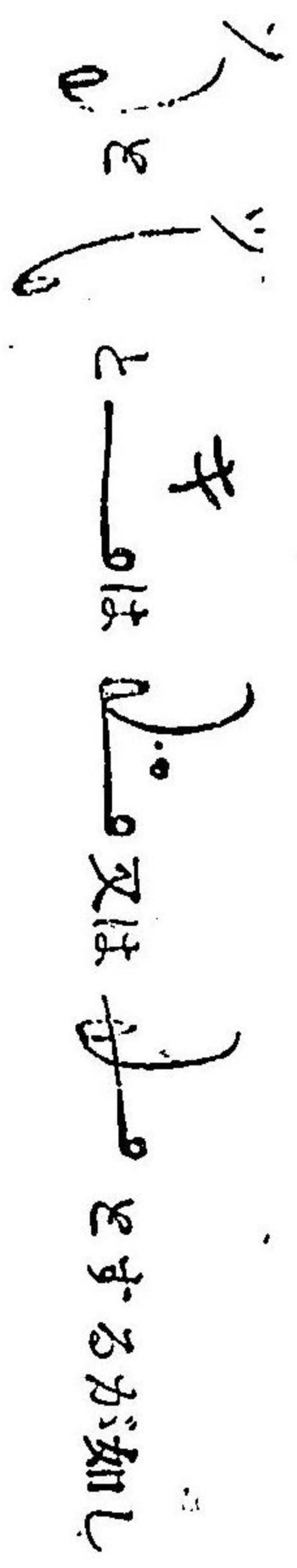
濁音 とは俗にニゴリ音と云ふ例合ばガギグゲゴザジズゼゾ、ダヂヅデド、バビブ  
 ヘボ、ヂチヂヤチエチエチヨ等の類也是は單音復音の文字に異ならず唯其文字の太く  
 するのみなれば茲に其文字を詳記するの必要を認めれば其例のみを左に示すべし

がの字を記さんには 太く「ガ」と記すが如し又「ガ」を「ガ」  
 とするが如し

此の濁音に就き斯様な質問を寄る者あり「鉛筆を以て太く細くするは自由ならず如何  
 して之を見分る哉」と成程墨筆と違ひ太細に大なる差は出来難くと雖も少し力を入れ  
 ると入れざるとを以て其墨鉛の色を見分るに容易なり蓋し速記するに鉛筆は極く輕る  
 く手に持つて記する所以なり、且つ多少の太くする位は自由ならん

詰音 とは字の如く詰りし音なり即ちツ丈けを省きて局部に「を」を付し又は字と字を

交<sup>ま</sup>ゆるの二種<sup>しゆ</sup>あり學<sup>まな</sup>ぶ者<sup>もの</sup>何<sup>い</sup>れなりとも臨<sup>りん</sup>機<sup>き</sup>應<sup>おう</sup>變<sup>へん</sup>に應<sup>おう</sup>用<sup>よう</sup>して速<sup>そく</sup>記<sup>き</sup>力<sup>りき</sup>の速<sup>すみ</sup>かなる方<sup>かた</sup>に力<sup>ちから</sup>むべし、例<sup>たと</sup>令<sup>れい</sup>はソツキケツコ<sup>ソツキケツコ</sup>の如<sup>ごと</sup>し



カ とするが如く 以下是に倣ふべし  
キ とするが如く

長音<sup>ちやうおん</sup> とは發音<sup>はつおん</sup>の長<sup>なが</sup>き音<sup>ね</sup>を云<sup>い</sup>ふ即<sup>すなは</sup>ちカーとかシー等<sup>ら</sup>にして其<sup>その</sup>必要<sup>ひつやう</sup>最<sup>さい</sup>も多<sup>おほ</sup>きものなれば輕<sup>かろ</sup>くしく觀<sup>かん</sup>過<sup>か</sup>すべからず、却<sup>かえ</sup>說<sup>せつ</sup>斯<sup>し</sup>音<sup>おん</sup>は殆<sup>ほと</sup>んど文字<sup>もじ</sup>を示<sup>しめ</sup>す要<sup>えん</sup>なき程<sup>ほど</sup>のものなり、  
开<sup>ひら</sup>は單音<sup>たんおん</sup>と異<sup>こと</sup>なる所<sup>ところ</sup>一部分<sup>いぶぶん</sup>なればなり、則<sup>すなは</sup>ちアーイーウーエーオーカーサーターナー  
ハイマーマーラーワーの十四<sup>じゅうし</sup>文字<sup>もじ</sup>は單音<sup>たんおん</sup>に點<sup>てん</sup>を打<sup>う</sup>ち、又<sup>また</sup>たキーシーチーニーヒーミー  
イーローの八字<sup>はち</sup>は單音<sup>たんおん</sup>より長<sup>なが</sup>く(結<sup>むす</sup>ひ先<sup>さき</sup>に非<sup>あら</sup>ず)し他<sup>た</sup>は總<sup>すべ</sup>て結<sup>むす</sup>ひ先<sup>さき</sup>を大<sup>おほ</sup>きく長<sup>なが</sup>くする  
の差<sup>さ</sup>あるのみ、(注<sup>ちゆ</sup>意<sup>い</sup>) 長音<sup>ちやうおん</sup>に詰音<sup>せつおん</sup>は一見<sup>いちけん</sup>誤<sup>あや</sup>るが如<sup>ごと</sup>く左<sup>ひだり</sup>れ詰音<sup>せつおん</sup>は綴<sup>ついで</sup>字<sup>じ</sup>の次<sup>つぎ</sup>目に  
點<sup>てん</sup>を打<sup>う</sup>つものにして長音<sup>ちやうおん</sup>は是<sup>こゝ</sup>と異<sup>こと</sup>り一文字<sup>いちもじ</sup>の中央<sup>ちゆうじやう</sup>にして且<sup>かつ</sup>つ其<sup>その</sup>直<sup>ちやく</sup>近<sup>きん</sup>に點<sup>てん</sup>を打<sup>う</sup>つものな  
り故<sup>ゆゑ</sup>に其<sup>その</sup>區<sup>く</sup>別<sup>べつ</sup>を知る事<sup>こと</sup>容易<sup>りやく</sup>なるべし

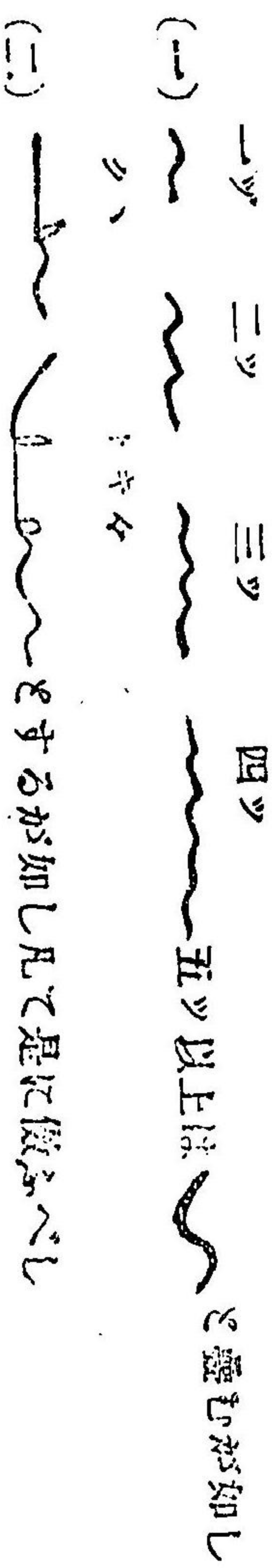
長音

アー	イー	ウー	エー	オー
カー	キー	クー	ケー	コー
サー	シー	スー	セー	ソー
ター	ティー	トゥー	テー	トー
ナー	ニー	ヌー	ネー	ノー
ハイ	ヒー	ヒュー	ヘー	ホー
ロー	リー	ルー	レー	ロー
マ	ミー	ムー	メー	モー
ワ	ウィー	ウィュー	ウェー	ウォー
イー	イー	イー	イー	イー
ロー	ロー	ロー	ロー	ロー
ナー	ナー	ナー	ナー	ナー
ハイ	ハイ	ハイ	ハイ	ハイ
イー	イー	イー	イー	イー
ロー	ロー	ロー	ロー	ロー
ナー	ナー	ナー	ナー	ナー
ハイ	ハイ	ハイ	ハイ	ハイ
イー	イー	イー	イー	イー
ロー	ロー	ロー	ロー	ロー
ナー	ナー	ナー	ナー	ナー
ハイ	ハイ	ハイ	ハイ	ハイ

疊たみせん 音とはタ、ミ、テ云ふ發音はつせんなり即ちシ、ト、キ、等らうなり、其例左の如し

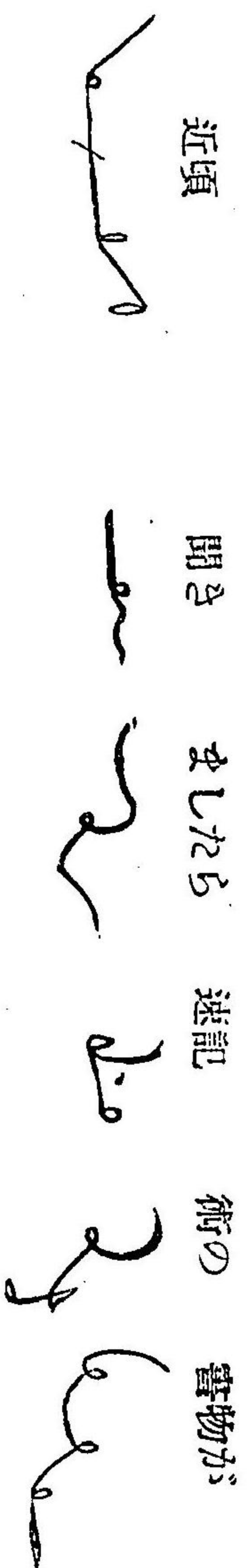
一ツ 二ツ 三ツ 四ツ 五ツ以上は

と聲むが如し

①) 

さて以上の諸音しよせんを記憶きおくせば定めて如何なる雜語ざつごも筆記ちひりし得べく依つて以上諸音しよせんを應用おうようして茲こゝに大練習たいれんしよを試むべし

近頃 聞き ましたら 速記 術の 書物が



澤山

出来た

どの

事で

ありませうが

皆

何れる

書物の

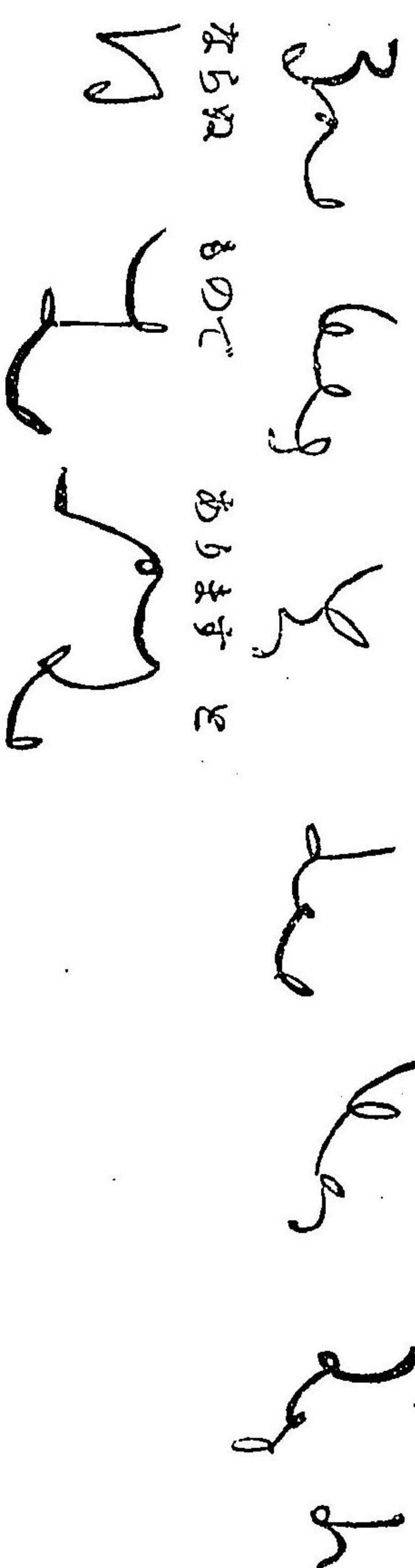
體裁

のみで

到底

實用

には



ならぬ もので あります と

右みぎの如ごとく何なんなりとも何度なんどとなく練習れんしよを積み耳みみに聞くと直ぐ筆ふでに現あらわる様ようならざる可べからず  
尾音びせん とは讀よんで字じの如ごとく一言一句の句切りに用ゆる即ち語尾の音なり是はこれぞ



て學まなび來きたりし文字もじと異ことなり頗おとる小ちひさく筆ふでの切きれ目めに付つける文字もじなり

尾 音

ニ テ フ ワ キ モ ト ル  
 ノ ソ ハ ニテ ノデ ノゾ ノニ トキ

ト云フマセシマセン マスマスル ナリ スペシ ス可ラズ

有可ラズ 非ザル也 ケレテ 雖モ ナカレ デス

テセウ ル、モノハ ベカラズ ナレテ ナル

マセウ スペキ也 ナレバ ナケレバ シキ シク マシタ

注意 ▲ 尾音中に他の音

字に能く似たる文字も  
 あらん然れども前項に  
 述べたる如く語尾のみ  
 に使用するのみならば  
 頗る小さく記するが故  
 決して過誤の憂なく又  
 譯文に苦む事あるなし

音 本

恰も	或は	豊計らんや	至る	苟も
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
所謂	如何となれば	聊か	孰れ	嬉し
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
疑ひ	伺ひ	遠慮	得らる	演説
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
教ゆる	凡る	面白い	恐る	驚く
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ
恐らく	考へ	完全	假に	學問
ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ	ㇿ

大日本	近頃	熟々	天皇	天皇陛下
兎角	何故	何となれば	尙	何卒
成程	何	何時	何ぞ圖らん	中々
南無阿彌陀佛	南無妙法蓮華經	本日	人間	人間社會
俄か	而已ならず	陳れは	甚だ	反對
偏に	殆ど	勉強	程	誠
益々	全く	間違ひ	皆	無暗

學校	極めて	苦し	原因	結果
會社	結構	縣會	検査	警察
現在	試み	心	悉く	脩て
幸ひ	賛成	而も	然らば	然り
親切	自由	諸君	事實	實に
新聞	速か	即ち	政治	政府
折角	拙者	絶對的	抑も	速記
速記術	ソコデ	假令は	只今	爲め

無論	無理	明治	妙	問題
最も	目的	最早	止むを得ず	約定
約束	冗んや	依て	世の中	理由
笑ふ	我罷	私	僅か	

注意 本音に限り他の音字と可成綴り合さる様注意すべし蓋し復文の際往々間違を來せる所以なり

以上本音は最も實用に適する最も人の多く用ゆる言語なれば一字も餘さず記應すべし又前項にも述べたる如く何れも單音兩音より出でたる文字なれば其變化したる處に着目して記應の材料に供せられよ

句讀標 は讀んで字の如く別に解釋を下すまでもなるとも尙念の爲め左に明にすべし

(首文標)とは速記する以前に是より始むと云ふ時に之を用ゆる者とす

(疑ひ)とは耳に聞ゆる其要領判然ならざる時に用ゆる

(句點)とは譯文の節其便ならしめん爲一句一言に之を用ひる者とす

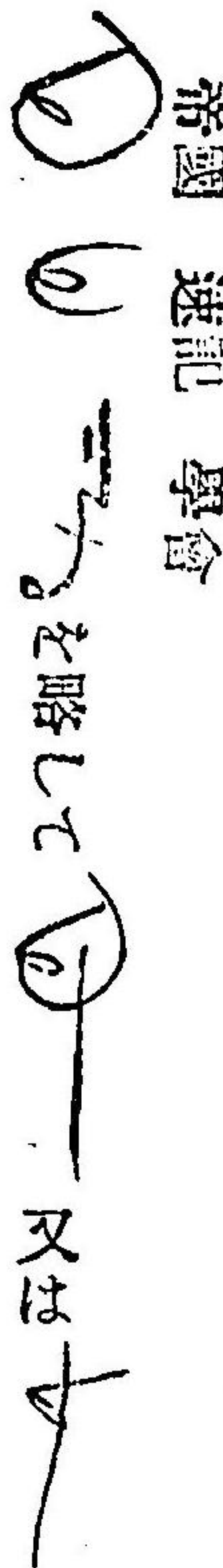
段落、未完、前承、結尾、落字、人名又は地名の如きは文字の處に用ひて譯文を使ならしむべし

句讀標

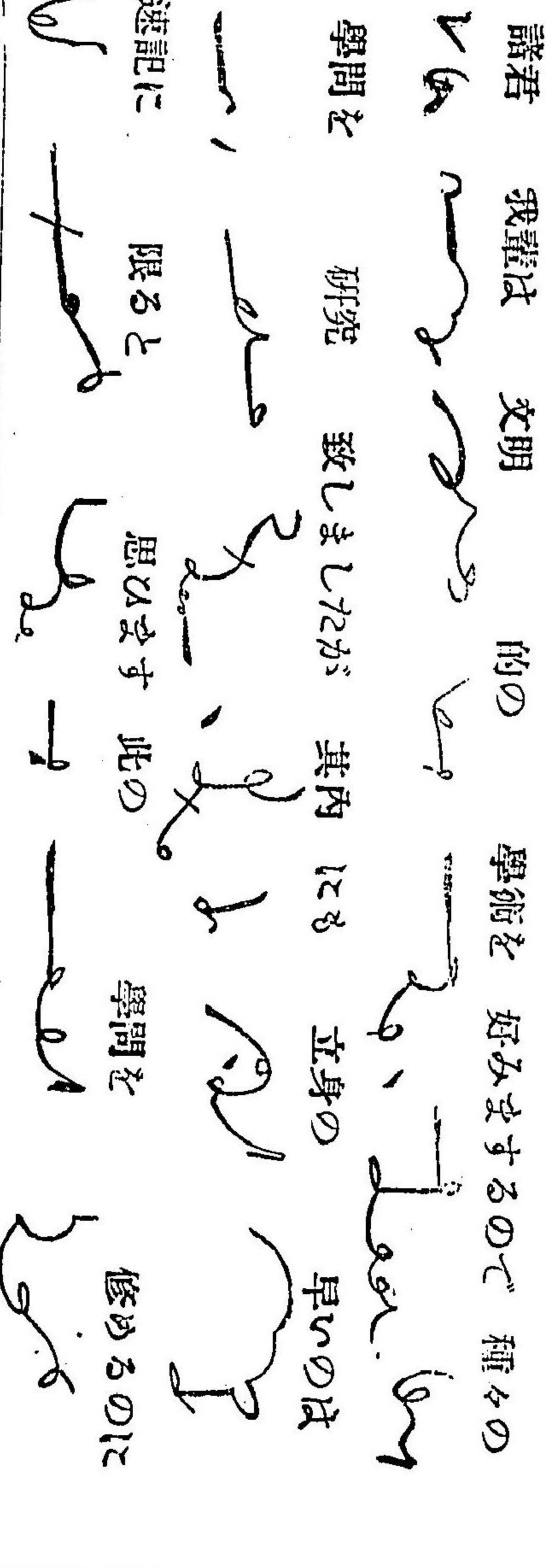
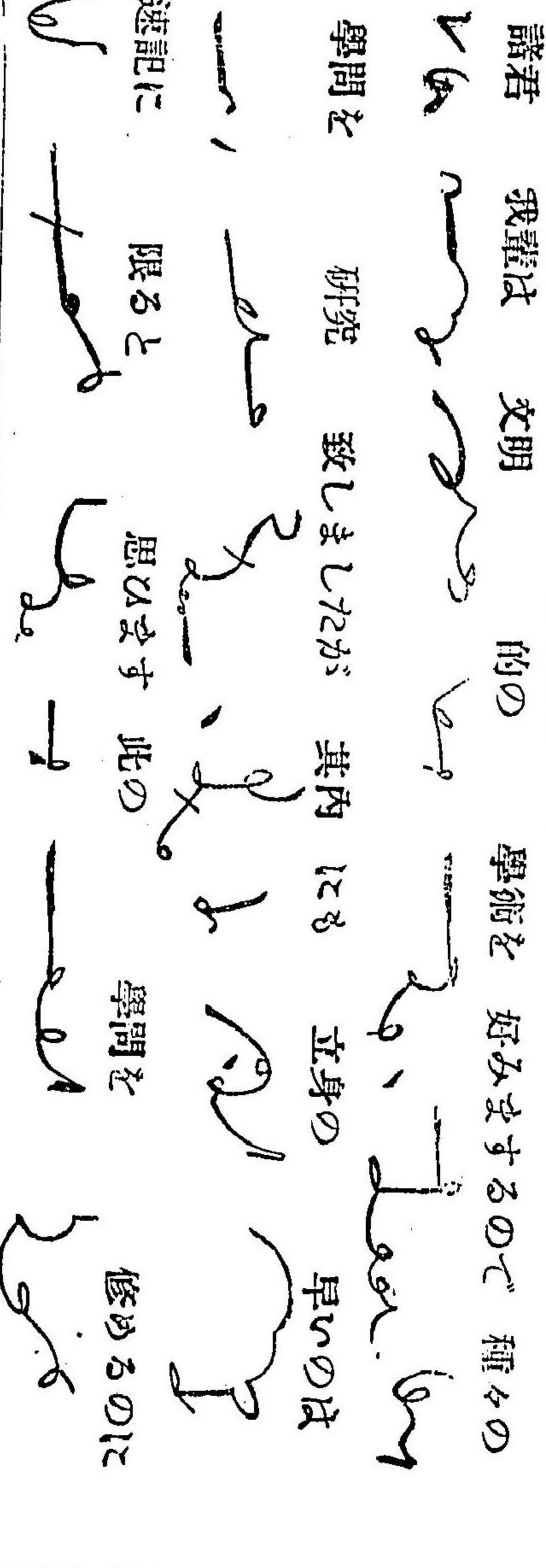
首文標	句點	疑ひ
段落	未完	承前
結尾	落字	

人名又は地名

省略法 是速記を畧す即ち筆を省くの法にして假令は帝國連記學會の演說速記に行  
 けは其會名が幾つも出る故に之を一一文字に現すは實驗上煩勞する者なり是が爲め此  
 の省畧法を應用せば大に便利なり左に其例を掲ぐ

帝國 漢語 魯吟  

 又は

右の如く凡て冠字を一字取りて他は略すべし  
 注意 此の説明を誤り、速記の凡てを省略し得るかとの質問する者あれば前にも述  
 べたる如く速記需用者の名のみを省略するものなれば、餘り深く取るに足らず倍々  
 是れにて諸君は速記術に關する凡ての文字を記憶せられたるならん是よりは速記力に  
 勉める事に注意せざる可からず、於是以上學び來りし文字を以て大々練習を始むべ  
 し而して一分間に五十音の速記力(假名本字を問はず勘定して)とならば他人になん  
 なりとも辨せしめて練習するは最良法なりとす

諸君 我輩は 文明 的の 學術を 好みまするので 種々の  

 學問を 研究 致しましたが 其内にも 立身の 早いのは  

 速記に 限ると 思ひます 此の 學問を 修めるのに

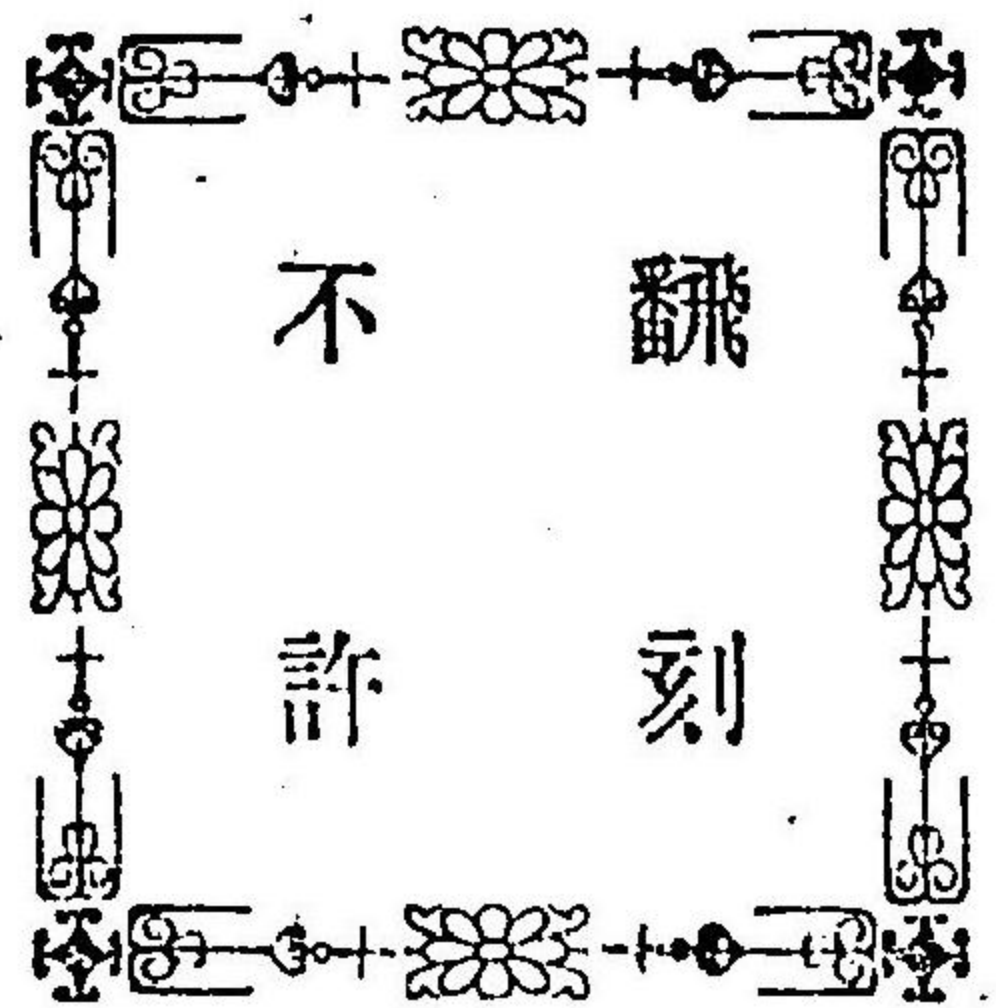
就き ましては 他に 必要の 學問が ある 夫れは  
 申迄も ない 漢學 國文で 思れを  
 研究して 置くに 大變 便利な 事がある

斯くの如く何なりと練習し二ヶ月の課程を畢れば茲に諸君は本會成規の速記術を修業したる者なりとす、然れども是れにて充分の技能に達したりとは認むる能はざるなり蓋し多くの中には家事多忙の者或は薄志弱行者もあらんが爲なり依て其速力を一分間に何音速記し得らるゝかを試し之を速記文に附記し送らるべし是を以て本會の所見に

より卒業者と認むる時は直ちに其證書を授與すべし  
 又認定を下す能はざる時は直接試験を行ふ事あるべし、而して其練習を修了したると認むる程度は速記力の一分間に二百音以上ならざるを得ず、其音数を計算するは「ゴザリマス」なら譬ひ本音一字に書くとも之を五字として數ふるか如し、以て其試験の程度を知るに足らん

明治卅八年二月十日印刷

同 年二月十三日發行



京橋區松屋町二丁目六番地

發行人兼編輯人 伊藤浪吉

京橋區松屋町二丁目六番地

發行所 帝國速記學會

京橋區中橋大鋸町十四番地

印刷者 北澤久太郎

同所

印刷所 北澤活版所